

2014 年度 SFC 政策研究支援機構 最終報告書

助成No2：総合政策学部4年 木勢翔太

タイトル：東北地方における共創型農漁業コミュニティの形成に向けたパッケージ開発

■研究目的

東北地方の農漁業における生産者と消費者との関係が構築される過程の中で、共創によるコミュニティがもたらす価値が問題解決にあたっての基盤になりえるかどうか、東北食べる通信(情報誌に食べものが毎月届くサービスを展開する NPO 法人東北開墾の事業モデル)を事例として取りあげ、その過程を明らかにすることが研究の目的である。研究活動は NPO 法人東北開墾様の全面的なご協力を得ながら、筆者のみの単独研究となる。

■研究手法

東北食べる通信のコミュニケーション基盤として利用されている facebook グループの投稿データをもとに、特集月毎の読者や生産者、編集部の対応を体系して調査しながら、生産者によるインタビューも行った。

■研究成果

①累計投稿が 1827 件(201307~201408)にも上り、月ごとにばらつきはあるもののおおよそ 100 件~150 件ほどの投稿があった(図 1)。投稿数に若干の変化がある要因としては、「つくり手の SNS の使いこなし具合」や「食材の調理のし甲斐があるか」など多くの関係が示唆された。



図 1：東北食べる通信の facebook グループの投稿数の推移

②投稿内容は設立当初から時が下るにつれて本来、投稿を意図してなかった告知や現地情報といった「発信型」の投稿が多くなっていった(図 2)

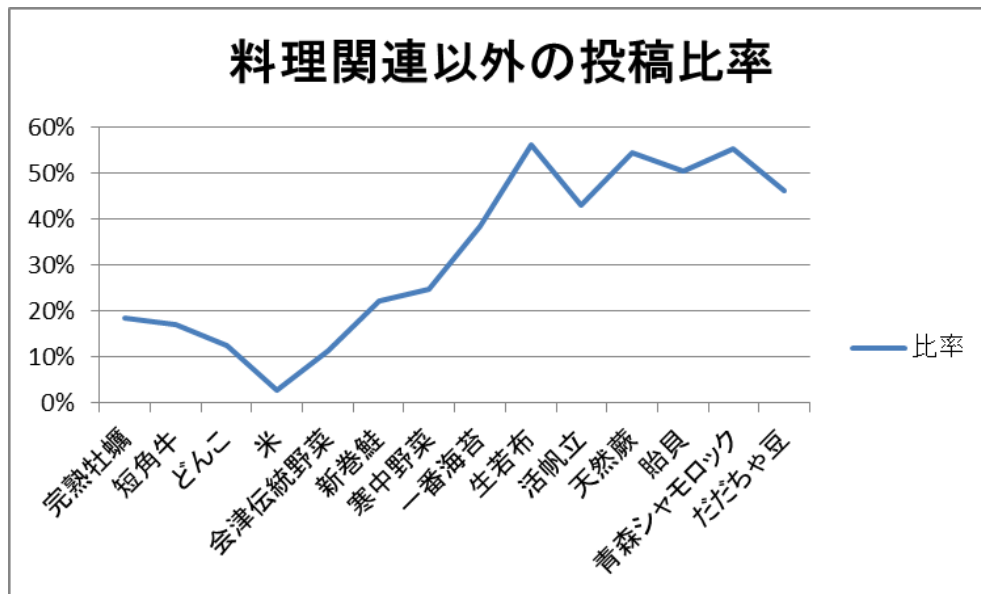


図2：東北食べる通信 facebook グループにおける料理関連以外の投稿比率

③一般のオンラインコミュニティに比べて、比較的多い発信者とコミュニケーターが活動していることが分かった（図3）

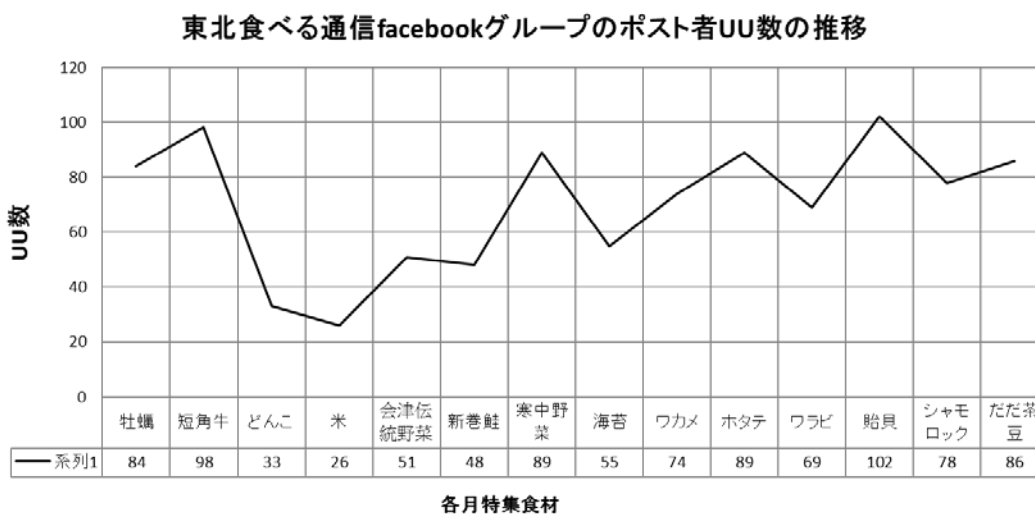


図3：東北食べる通信 facebook グループの投稿者ユニークユーザー（UU）数の推移

※フィールドワーク実績

- ・ 福島県会津若松市：会津伝統野菜農家 長谷川純一氏
- ・ 福島県喜多方市：御種人参農家 清水琢氏
- ・ 岩手県大船渡市：帆立漁師 佐々木淳氏
- ・ 宮城県南三陸町：若布漁師 千葉拓氏

【今後の研究の展望】

本研究では、東北食べる通信が運営しているオンラインコミュニティに絞って研究を進めたが、東北食べる通信ではこれ以外にも CSA（特定の生産者と長期間にわたって交流を行う仕組み）や座談会（編集長と語りあう場を設ける）、生産現場を巡るツアーなどそれぞれ同じ読者でありつつも、異なる層が参加している状況にある。消費者と生産者というラベリングではなく、都市生活者と地方に暮らす人の相互交流から、関係性を紡いでいくための諸施策が求められる。オンラインコミュニティはコミュニティとしての一側面であるがゆえに、他のリアルコミュニティとの重なり合いや関連性を今後の研究の方向性として提示できると考えている。

【研究を通しての感想】

東北食べる通信は規模の拡大を迫わずに 1500 人限定のサービスモデルを採用したからこそ、内部のコミュニティの攪拌をしていかなければ、コミュニティ活動が停滞してしまうことが容易に想定できた。一方で研究を進めていくうちに、5%~9%にも上る発信者がいることがわかり、コミュニティに対して熱心に取り組む読者がいることが見出せた。コミュニティとして ROM の人も居る中でいろんな毒性の人がまじりあうような場づくり設定が誌面製作を起点に考案できていければと考えるようになった。食べる通信モデルが各地域に横展開しているからこそ、生産者と消費者による交流活動も小さい単位で無数に広がっていく中で、価値ある情報をストックしつつ、コミュニティのエンゲージメントを高めていくことをプラットフォームとして提供していくことが今後の課題と言えるのではと思う。また、生産者インタビューでは、読者グループの参加を通じて、生産者自身の考え方にも変化があったことが見出すことができた。生産者にとっても消費者がどのように食しているのか知る術がなかった分、彼らに対する驚きや発見を意図せずして facebook グループ運営で気づけて行ったことがわかった。